

Title	W・J・モムゼン著 『マックス・ウェーバーとドイツ政治』： 一八九〇年 - 一九二〇年
Sub Title	Wolfgang J. Mommsen : Max Weber und deutsche Politik 1890-1920
Author	多田, 眞鋤(Tada, Masuki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1960
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.33, No.7 (1960. 7) ,p.102- 109
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19600715-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



Wolfgang J. Mommsen:

Max Weber und deutsche Politik

1890-1920

1959, Tübingen

W・J・モムゼン著

『マックス・ウェーバーとドイツ政治』

——一八九〇年—一九二〇年——

一 近時、マックス・ウェーバーが、近代ドイツの政治過程における地位と役割に関する研究は、ドイツの内外を問わず、かなりの深度を示しつつあると表現しても敢えて過言ではないと思われる。

二、三の例を挙げれば、J. P. Mayer, Max Weber and German Politics, 1948. 4、 Johannes Winckelmann, Legitimität und Legalität in Max Weber Herrschaftssoziologie, 1952. 更に Max Weber, Staatssoziologie, Mit einer Einführung und Erläuterungen herausgegeben von Johannes Winckel-

mann, 1956. 等々は、ウェーバーと近代ドイツ政治の關連を追求した勞作といえよう。

一九一四年、第一次世界大戰の勃發とともに、自國の政治的未成熟を憂慮し、將來のパーспекティフに悲觀的であつたウェーバーは、民主主義的な情熱を傾注して獨自な政論を主張し、讓歩することなく頑迷な保守主義と對決したのであつたが、歴史の趨勢は、彼の意志とは相違した方角にその進路をすすめていつたのである。然し、ウェーバーの政治的情熱と、その卓越した理論を背景にもつた政論とは、今また倍加した光澤をもつてドイツ國內のみならず、世界の民主主義に恩惠をもたらしつつある。

ここに紹介を試みるW・J・モムゼンの著述「Max Weber und deutsche Politik 1890-1920, 1959 Tübingen」も又、その意味において優れた勞作であるといわねばならない。

本書は次の十章と附説一章よりなつている。當初に一括して内容の各章を掲げてみよう。

(一)若キウェーバーの政治的展開 (Die politische Entwicklung des jungen Webers)

(二)家長主義、資本主義と國民國家 (Patriarchalismus, Kapitalismus und Nationalstaat)

(三)マックス・ウェーバーの政治理想としての國民的權力國家 (Der

nationale Machtstaat als politisches Ideal Max Webers)

(4) ドイツ政治の將來の課題としての帝國主義 (Nationaler Imperialismus als Zukunftsaufgabe deutscher Politik)

(5) マックス・ウェーバーと第一次世界大戦前のドイツ國內政治の展開 (Max Weber und die innenpolitische Entwicklung Deutschlands vor dem Weltkrieg)

(6) 對外政治と國內政治體制 (Außenpolitik und innere Verfassungsstruktur)

(7) ドイツ帝國の試煉としての第一次世界大戦 (Der Weltkrieg als Bewährungsprobe des deutschen Reiches als Großmacht)

(8) 崩壊と新出発 (Zusammenbruch und Neubeginn)

(9) マックス・ウェーバーとワイマール憲法の成立 (Max Weber und die Entstehung der Weimarer Reichsverfassung)

(10) ワイマール共和國からナチス政權確立まで (Vom liberalen Verfassungsstaat zur plebiszitären Führerdemokratie) であり、更に附説として、「マックス・ウェーバーによる支配の形式的合法性と合理的正統性の關係の問題について」(Zur Frage des Verhältnisses formeller Legitimität und rationaler Legitimität der Herrschaft bei Max Weber)の短論が加えられている。

二 著者 W. J. モムゼンは、序言において、次のごとく本書の

性格と構成について述べている。

「ウィルヘルム時代とワイマール共和國の初期の頃の『マックス・ウェーバーとドイツの政治』に關する以下の研究は、しばしば試みられて来たようなマックス・ウェーバーの政治的意思と思想を、その著述から解釋するのではなく、むしろ逆の方法をとるべきであると考え。それとともに、この考察は政治家ウェーバーの發展を、その時代の現實的な政治問題に對しての彼の態度を通じて全く具體的に探究してゆこうとするものでもある。

この試みは、マックス・ウェーバーの中心的な政治的諸カテゴリーをその實體にまで立ち入つて分析し、彼を導く政治理想の歴史的位位置を規定するために、上述の方法で確實な基盤を獲得しようと努力するものである。

そうすることによつて、この考察は、同時にまた一八九〇年から一九二〇年にかけてのドイツ政治史の解明に寄與することになる。』と述べ、次いで敘述の方法について言葉を續けている。すなわち、

「このような課題設定によつて、研究の内的構造には、傳記的 (biographisch) 方法と、論文的 (monographisch) 方法とをコンビネーションする必要が生じてくる。

ウェーバーの政治的發展の多様な局面の敘述を、彼のなかでしば

しば一つの支配的な役割を演ずるところの政治的諸理想や諸要求の分析とを結びつけるという試みがなされている。従つて、概して傳記的・年代的序列を基底としてはいるのであるが、敘述は、個々の一定の問題視座(Problemgestaltspunkte)に従つてゐる。このような方法をとる場合には、時に應じて一定の問題意識のその時々との關係によつて早期のものを後述したり、より後期のものを先述したりする必要があつた。同じ意味で、重複を完全に避けることもできなかった。然し、われわれはウェーバーの政治的見解の發展の歩みが充分に明らかにされているように希望してゐる。」とモムゼンは述べる。

そして、更にモムゼンは、ウェーバー研究に際し、重要な二、三の文書、例えば、ウェーバーが一九一七年五月コンラード・ハウスマン(Conrad Hausmann)に與えた憲法改正案を基とした覺書や、一九一八年二月四日附の平和條約締結問題に關する第二覺書等の發見せられなかつたこと、あるいは又書簡や遺稿の根本的な脈絡が全く破壊されてしまつてゐること、就中、ウェーバーの相手方の側の當の書簡が保存されてゐなかつたこと、今次大戰の戦亂によつて數多の遺稿類が紛失し、特にフリードリッヒ・ナウマン(Friedrich Naumann)の重要な意義を持つ遺稿の喪失は、ウェーバー研究の上に大いなる障害になる旨述べてゐる。

更にモムゼンは次のようにいう。すなわち、「われわれの研究は、マックス・ウェーバーの政治的意思と著述のよつて立つ總體的狀況が充分に明らかになされていれば、その本來の意圖を達成してゐるのである。然し、彼の當面した政治に對する直接的影響の大きさがいずれの場合にも正確に規定されてゐるという意味ではない。

ウェーバーが、その政治思想の多くの原則の點で、ウィルヘルム時代とビスマルクの政治の立入禁止地帯(Bankreis)のなかにどれほど強固に踏み止まつてゐるか、更に又彼の政治理論上の諸見解が、ウィルヘルム時代のドイツの政治的、社會的諸關係に對する論争から、更にどれほど發展的に覺醒してゐるかという點が、細部にわたつて解明されればそのことの意味は、政治思想家マックス・ウェーバーを、單に歴史的に位置づけたというにとどまらないのである。

彼の思想の本質的な諸要素は、その時代の歴史的、政治的諸條件からは解明されえないこと、哲學的基礎觀念や、われわれが敢えて問題提起をしてゐるところの最終的な價値の確信が一つの本質的な役割を演じてゐるということとをわれわれは意識してゐる。

然し、ウェーバーの學術語(Terminologie)そのものを、批判的に検討もしないで、それを現在の諸關係に適用しようと努力する「オーソドックスな」ウェーバー解釋とは反對に、ウェーバーの政治

的ならびに國家社會學的諸見解の歴史的制約性と、それが有効である限界を考慮した場合に、それらの諸見解は正しく評價されうるであらうこと、その場合にのみそれら諸見解の眞理内容と、その現實的意義が把握されうるであらうとわれわれは信じているのである。」とモムゼンはいう。

モムゼンの指摘のごとく、マックス・ウェーバーに特有な諸々の術語の性格とその成立を、批判し検討し、吟味せずしてその術語を使用する誤りを、われわれは往々にして犯しているのではないかと考えさせられるものがある。

さて、本書の性格、構成について、著者モムゼンの「序言」を引用することによつて以上のごとく簡単に紹介してみた。次いで本論の内容に移つて紹介してみたいが、ここでは第一章の「若きウェーバーの政治的展開」に重點をおいて著者モムゼンのウェーバー研究の一端を紹介したいと思う。

三 著者モムゼンは、その第一章「若きウェーバーの政治的展開」の當初に次のように述べている。「マックス・ウェーバーは、その全生涯を通じて、政治的問題に没頭していた。彼の同時代の少なからぬ人々が、時には彼自身も、彼が實際政治家の道を歩むのではないかと期待した。彼の學問上のあらゆる著述や、知的な卒直さと、學問的客觀性をもとめる彼の假借ない努力は、ある意味では、その時

々の實際的な政治的事件に對する距離と、内的自由を得るための不斷の大規模な試みであるとも解釋されうるのである。その限りでは實際政治というよりは、むしろ政治一般としての政治が彼の生涯と勞作において中心的位置を占めていた。そして、この事は、すでに彼の生涯の初期の研究にも該當することであつた。マックス・ウェーバーは、いわば政治の中に産み落されたのである。(Max Weber wurde gleichsam in die politik hineingeboren.)」(二頁)ウェーバーに與えた彼の父の影響、父の友人からの影響、ウェーバーの國民自由黨への關心などについて詳述している。更にモムゼンは、ハイデルベルク大學時代のウェーバーの諸研究、年長の從兄であるオットー・パウムガルテンとの交友、歴史學者であり、ウェーバーの伯父にあたるヘルマン・パウムガルテンの、ウェーバーに與えた深甚な影響について次のようにいう。「パウムガルテンが、若きウェーバーの政治的見解の發展に及ぼした影響は顯著なものがある。確かにウェーバーは、パウムガルテンのするどすぎる批判をそのまま採用してしまふようなことは決してなかつた。それとは逆に、パウムガルテンの陰影のあるベンジスティックな診斷とは對立する形で、ウェーバーの政治的見解は常に展開してきている。然し、父親の家における一方的な國民自由黨的視野から彼を解放し、ビスマルクの組織の内部的脆弱性について、ウェーバーの眼を開かせるのに

あずかつて力のあつたのは、バウムガルテンその人であつた。特にビスマルク政治の權力的な、デマゴギシユな性格については、彼はバウムガルテンと見解を同じくしている。」(七頁)更に又、歴史家トライチュケに對するウエーバーの態度を次のように述べている。

「ドイツの教養ある市民階級の大部分に對するトライチュケの有害な影響は、バウムガルテンの手下にのつとつて、マックス・ウエーバーをして大歴史家(トライチュケ)との對立へと追いやつた。

彼は、バウムガルテンの鋭い評定に單純に同意したわけではなかつたが、彼は又、トライチュケが、學問的客觀性の諸要求を充分に満足させているわけでもないという意見をもつていた。それにもかかわらず、ウエーバーは、トライチュケが聴衆におよぼす強力な印象、

彼の火のような性格が放射する魅力から脱しきることではなかつたのである。」(九頁)が、然し、「ウエーバーは、政治と學問を混同させたトライチュケのやり方を厳しく却けた。そこには、既にあらゆる種類の講壇のデマゴギーや、豫言に反對した後年の彼の情熱的な戦いが豫告されている。確に、トライチュケにあつては、**政治**

的な**實**行熱 (Tatselidenschaft) と一面性の氾濫の中にも、**理想**的な**基**盤を**求**める……偉大な、情熱的な努力が認められるとウ

エーバーはいつてゐる。然し、實際には、これらの過剰は、**眞**面**目**な、**良**心的な**結**果に煩わされない仕事というものは、**眞**理の**觀**點

においてのみ深甚な尊重をうける」という成果をもたらすであろうとウエーバーはいう。それにもかかわらず、マックス・ウエーバーの政治的見解に對する、トライチュケの影響を過少評價することは許されないであろう。ウエーバーは、ベルリンで、トライチュケの講義を少くとも二つ、『**國家と教會**』についての講義と、『**政治學**』についての有名な講義を聴講している。トライチュケは、**國家の本質**についての自己の論議の中心點に、**權力思想**を据えたのであるが、この**權力思想**、**國民國家**を政治的行動の規準に高めること、**小國家**存在の忌避、これらすべては、ウエーバーの後の政治的見解の中に、部分的には比較にならないほどの厳しさを以て再現されている。」(一〇頁)とモムゼンは指摘している。

更にモムゼンは言葉を續ける。

「マックス・ウエーバーは、自由思想派の政策を純粹に空論的なものと感じていた。彼は、その政策を、積極的な政治を行うには、全く不適當なものとみなしていた。それ故、彼は、彼らには殆んど將來性を認めていなかった。自由主義者たちは、皇太子フリードリッヒの統治によつて國內政治が轉換され、リベラルな軌道にむけられるであろうという期待が高まつていたが——バウムガルテンや父ウエーバーもその意見に傾いていた——マックス・ウエーバーにはその希望は根據のないものとしか考えられなかつた。彼の見解によ

れば、ドイツの諸黨派の關係は、決して第二の (liberale Aera) のための前提を與えるものではなかつた。自由主義そのものの分裂と腐敗がそれを妨げるように思われたのである。自由思想派が、王冠の交替に賭けた(卑屈な)投機を、彼は唾棄すべきものとみなした。彼は當時、ヘルマン・パウムガルテン宛に書いている。『……このような人々と一緒になつて、他日の積極的な政治を行うという考えは全く棄てねばならない。そのような考えは、一方では型にはまつた狂信的なデマゴギーによつて、他面では盲目的なビスマルクの徒によつて損われ、永遠に茶番劇が続くことになるのである』(一五一—一六頁)とモムゼンは、ウェーバーが國民自由黨に對して決して好意的でなかつたことを述べている。次いでモムゼンは、一八八七年當時のウェーバーの講壇社會主義者への接近を述べている。

四 すなわち、「講壇社會主義者への接近は、マックス・ウェーバーの政治的發展にとつて、一つの轉廻點を意味していた。その接近は、彼の學問的並びに政治的未來にとつて、大きな意味を有し、又彼がそれまで續けて支持して來た自由主義の見解を超えて、彼をはるかに前方へと導いてゆくことになつたのである。」(一七頁)が、「ウェーバーは、當初から講壇社會主義者達については、(その強く官僚的な素質) (die stark bürokratische Ader) に不信の念を持つており、後に結局は、彼はプロシヤ官僚階級の代辯者であり、

歴史家であるシュモーラーの、そして彼によつて指導された社會政策學會の官僚的方向の公然たる反對者たるべき運命にあつた。然しウェーバーは、ここに著述のための政治的に將來性を持つ力と、努力に値する社會科學的課題を發見した。その意味で、彼は社會政策學會への加入を決意し、程なくその積極的な學會の一員となつた。社會政策學會への加盟は、古い刻印を帯びた自由主義から、更に又パウムガルテンや父親の政治的見解からウェーバーが離れてゆく決定的な歩みを意味していた」といふ。次いでモムゼンは、若きウェーバーとドイツ保守主義との關連に移り、「一八九〇年に、ウェーバーが始めて投票に赴いた際に、保守派を選んだということをわれわれは知つてゐる。彼は、後に繰返し熱心にそのことを強調してゐる。『Parlament und Regierung im neugeordneten Deutschland』の中に在り、書物として出版される時には削除された全く卒直な一節——『個人的には、私は、若い人間として、このような汚らしい偽善者たち(保守派)には背をむけていた』という言葉は、ウェーバーの保守的な見解への方向が、方便にすぎなかつたことを證明しているが、それは又、國民的な權力國家に對する異常な烈しい信仰告白であり、その信仰告白が、ウェーバーを右翼へと引きつけることとなつたのである。』(一九頁)といふ。

而して、モムゼンは、若きウェーバーのキリスト教への接近につ

いて次のように述べている。今暫く、モムゼンの見解を紹介しよう。すなわち、「若い國民經濟學者は、急速な經濟發展と、それに伴う社會の構造變化が、傳統的なりべラルな方法では充分に解決しえないような問題を惹起したということを確認するよう迫られた。ウェーバーは時代の自由主義の位置を純粹にイデオロギー的なものと感じとつていた。そして、そのことは、事實がそうであつたよりもはるかに際立つていたのである。正にその點にウェーバーは自由主義の本來的な弱點をみたのである。▲經濟的並びに社會的問題が、これまでと同様に専ら前景に現われている場合に、利害のカテゴリに從つての區別が、結局はいつでも支配的にならざるを得ないような狀況は、自由主義に對して、何と言おうとも、限定された活動分野しか與え得ない。殊に自由主義そのものが、利益グループに分れて對立している場合には、なおさらのことである。」と一八九一年にウェーバーは、バウムガルテンに宛て書いている。個人的にも正にこの頃に、法律の分野から國民經濟と社會政策研究の領域へと移行すべく着手していた彼にとつて、經濟並びに社會問題が前景に現われていたのであつた。そして正にこの領域において、自由主義は役に立たなかつたのである。この際、この怠慢を取返すべく手を貸すことは、若きウェーバーには、勞するに値する課題と信ぜられたのであつた。

社會政策問題に對するウェーバーの新しく覺醒した關心は、彼をしてキリスト教・社會運動と接觸するに至らしめた。その運動は、その頃の年代にプロテスタントの教養人の仲間で大きな支持をうけていた。ウェーバーを惹きつけたのは、決してシュテッカー (Steph. Stecker) の活潑なアジテーションではなかつた。全く反對に、われわれの手許に残されている當時の手紙の中で、ウェーバーが、シュテッカーに言及しているところの僅かな言葉は、シュテッカー流の社會的保守主義、特に彼のデマゴギー的な現象形態に對する決定的な拒絶を明らかにしている。ウェーバーは、シュテッカーの反ユダヤ主義には全く組しえなかつた。直接には個人的な結びつきが決定的となつていたのである。ウェーバーの母親は、自己の社會的責任を意識した深いキリスト教的な考え方からして、この當時のキリスト教社會運動に個人的に非常に接近していた。

それ以外にも、ハイデルベルク時代の學友であり、ウェーバーの從兄であつたオットー・バウムガルテンがこの結びつきを橋渡しをしたのである。それで、ウェーバーは最初の福音主義社會會議 (Evangelisch-sozialen Kongress) に關與するようになった。この會議は、一八九〇年にシュテッカーが發足を呼びかけたものであり、特にかなり若い福音派の神學者や、プロテスタント派の教養人たちの間で、活潑な反響を呼んでいた。そこでは、ワグナーのような、年

輩のキリスト教・社會運動家と並んで、フォン・ハルナックを擁するリベラルな神學者たちが先頭に立ち、最後には、フリードリッヒ・ナウマンの指導のもとに、若いキリスト教・社會運動家たちの左翼的傾向を持つ反政府派が先頭をきつた。この派は又、シュテッカーの保守主義からの離脱、つまりキリスト教の世界觀を基礎として、社會政策的行動の形式について廣汎な討論に着手した。ここでウェーバーは、政治的に見解を同じくする同志を見出した。彼は、永年にわたつて共通の政治的行路を歩むこととなつた。

ウェーバーは、フリードリッヒ・ナウマンと生涯にわたる緊密な友情を結び、その友情は二人の運命に決定的な意味をもつようになつたのであるが、それは正にこの時に始つたのであつた。(二二頁)とモムゼンは、ウェーバーのキリスト教への接近、およびフリードリッヒ・ナウマンとの歴史的邂逅について以上のように描寫している。

五 以上によつて、「若きウェーバーの政治的展開」についての著者W・モムゼンの敘述を可能な限り原文に忠實に紹介してみた。

尤も、註釋を要する詳細な問題についてはこの稿において取擧げることが不可能であつた。然し、若きウェーバーが、その政治觀の展開過程において、時には自由主義に、時には保守主義に、ある時代においては講壇社會主義の陣營に、更には又キリスト教的社會運

動に共鳴しつつその思想的遍歴を試み、あるいは又、ヘルマン・パウムガルテン、オットー・パウムガルテン、ハインリッヒ・フォン・トライチュケ、フリードリッヒ・ナウマン等々の思想家を媒體として、自己特有の政治的觀念を形成してゆく過程は、モムゼンの筆致によつて簡明直截に描きだされているといえよう。モムゼンが、その序言に述べているところによると、數多の資料研究所、例えば、ドイツ中央記録所、ユブレンツの連邦記録所、大英博物館、London School of Economics and Political Science 等々を訪ね、あるいは又、ウェーバーの書簡、文書等の保存者を歴訪して、より正確なウェーバー研究に努力し、一書にまとめたことは、ウェーバー研究の今後に多くの有益な示唆を與えているものといわねばならない。筆者は、著者モムゼンの勞を多とし、本書の紹介を終りたいと思う。

(多田眞勲)